



総政人の巧 : 連載第4回 ~仕事をしながらの研究生活~

著者	黒澤 寛己, 三浦 哲司
雑誌名	同志社政策科学研究
巻	9
号	2
ページ	221-226
発行年	2007-12-20
権利	同志社大学大学院総合政策科学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011446

総政人の巧

—連載第4回—

京都市立伏見工業高校教員 黒澤 寛己さん

～仕事をしながらの研究生生活～

インタビュアー 三浦 哲司（博士後期課程2007年度生）



「研究成果を形に残すこと」のおもしろさを知り、社会人大学院生として大学院へ

【三浦】 早いもので第4回目を迎えました、同志社大学大学院総合政策科学研究科関係者のお仕事についてレポートする「総政人の巧」。今回は、京都市立伏見工業高校定時制（以下、「伏見工業」）教員の黒澤寛己さんです。黒澤さんは社会人大学院生として博士前期課程から公共政策コースに在籍され、現在も博士後期課程において真山達志先生のゼミに所属されて研究を続けています。それでは、はじめにそもそもな

ぜ高校の教員になられたのか、そのあたりからおうかがいしてもいいですか。

【黒澤】 私は幼い頃から柔道をやっておりまして、高校からは本格的に練習に励んだのですが、私が高校生だった当時は今のようにスポーツ医学などの知見を取り入れた「身体のことを考慮する」スタイルの練習はほとんど見受けられませんでした。それよりも、どちらかといえば「厳しい練習を根性で乗り切る」といった風潮が運動部活動には存在し、とことん身体をいじめるような練習ばかりしていました。そのため、私自身も運動部活動での怪我が絶えなかったんで

すね。そして、高校を卒業してからは昔からの憧れだった同志社大学の体育会柔道部に入って柔道を続けたのですが、大学に入学して、スポーツ医学や科学的なトレーニング方法の知識が増えるにつれて「自分が経験してきたような無茶な練習をするスタイルを貫く運動部活動のままでは、高校生を身体を壊してしまうだけなのではないか。そうならないためにも、自分が高校の教員になって身体のことをしっかりと考えた柔道の指導を行いたい」と思うようになりました。そこで、高校の教員になることに魅力を感じ、大学では教職免許を取って教員採用試験を受けることに決めました。

【三浦】なるほど。その後、高校の教員になられて、2003年に総合政策科学研究科に入学されましたよね。大学院に入学された動機はどのようなものでしたか。

【黒澤】1991年に高校の教員になってからは、無我夢中で教科指導はもちろん、運動部活動の指導などいろいろな仕事に取り組みました。そして、2001年度に文部科学省の派遣研修で京都教育大学教育学部附属教育実践総合センターの研究生となり、カリキュラム開発の専門家である大隅紀和教授のもとで1年間研究活動を行うことになりました。

その研修において、私は自らの研究成果を文章にまとめて紀要に掲載し、それを研究会などの場で発表するといった経験ができました。高校の教員の私にとって、こうした経験は学校という現場で仕事をしているままではなかなか味わえないものでしたし、「自分の研究成果を形に残すこと」のおもしろさを実感することになりました。そこで、私は「自らの興味・関心について掘り下げた研究をしてみたい」と考え、大学院で研究に取り組むことに決めました。

【三浦】数ある大学院のなかから同志社大学の大学院総合政策科学研究科を選ばれた理由はどのようなものでしたか。

【黒澤】理由は大きく4つありました。まずひとつめは、「総合政策科学」という研究科の名称のとおり、総合政策科学研究科では様々な学問分野について体系的に学ぶことができるからです。そして、幅広い学問分野にわたる授業で得られた知識というのは、実践の場において大いに役立ちました。ふたつめは、社会人大学院生に配慮した夜間中心の授業カリキュラムであ

るからです。これは教員として朝から夕方まで仕事をしていた私にとって大変ありがたいものでした。3つめは、スポーツ界のトップアスリーの何人かが総合政策科学研究科で学ばれていたからです。そのような方々と一緒に研究に取り組むことができるのは非常に魅力的でしたし、入学後も様々な機会を通じて交流させていただくことができました。最後の4つめは、高校の教員をしている大学時代の後輩（田中英一さん 京都府立鳥羽高等学校勤務 相撲部OB）が総合政策科学研究科を修了されていたことです。彼にいろいろと話を聞いたところ、自分の思い通りに研究を進められそうだという確信を得ました。同時に、大学時代の柔道部の恩師である横山勝彦先生が総合政策科学研究科で授業を担当されていたことも大きく影響しました。

社会人大学院生としての研究生活

【三浦】そののちに、黒澤さんは2005年に博士前期課程を修了され、同年に博士後期課程に進学されたわけですが、博士前期課程ではどのような研究生活を送られましたか。

【黒澤】まず、博士前期課程の1年目は授業に出席して単位を取得することに注力したため、非常に忙しかったのを記憶しています。朝から夕方までは当時勤務していた京都市立西京高等学校で仕事をし、6限が始まる18時25分に間に合うように勤務先から自転車で通学しました。大学院に通ったのは平日で3日くらいだったはずで、土曜日は授業に参加したり、自らの研究に取り組んだりして朝から晩まで大学で過ごしました。授業については、社会科および公民科の教員専修免許状取得のために、他の人よりも多く履修したと思います。その結果、学期末のレポートはたくさんありました。幸い、春学期のレポート提出期間がちょうど勤務先の夏休みと重複しており、大分助かりました（笑）。逆に、秋学期の提出期間は勤務先の3学期の最中でしたので、冬休みくらいから早めにレポート作成に取り掛かりました。

次に、博士前期課程の2年目は修士論文の作成に多くの時間を費やしました。とはいうものの、平日は仕事があるために、大学に行って資料収集を行う時間がなかなか取れません。それ

ゆえに、土曜日や勤務先の夏休み期間を利用して、集中的に資料収集を行いました。また、指導教授である真山達志先生には、無理をお願いしてお時間を取っていただき、研究室で丁寧に指導していただきました。そして、仕事と学業の両立でいろいろ苦勞したこともありますが、何とか自分なりに時間を上手く使いながら修士論文を提出し、博士前期課程を修了することができました。

【三浦】 そうでしたか。続けて博士後期課程に進学されたのはなぜですか。

【黒澤】 私は博士前期課程において、中学校や高等学校における運動部活動のあり方について研究しました。具体的には、運動部活動というのは各学校の自主性に委ねられている部分が多いのですが、それが何を目的としており、その効果はどのようなものであるのかなど、学校の運動部活動に関する現状と課題を整理しました。

そして、修士論文を執筆していくにつれて、もう少し自らの研究を続けてみたいという気持ちをもつようになりました。そこで、とりあえず修士論文では先ほど述べたように運動部活動の現状と課題についてまとめ、そののちには博士後期課程における研究を通じて「文武両道」を理想とした具体的な運動部活動のモデルを提示するという政策提言を目指すことに決めました。

【三浦】 そういうことだったんですね。それでは、これまでの大学院生活をとおして得られた「糧」のようなものはありますか。

【黒澤】 それはたくさんありますが、すぐに頭に思い浮かぶのは、やはり総合政策科学研究科の強みである「ヒューマン・ネットワーク」で

すね。先ほど少しお話したように、大学院における様々な機会をとおして、私はスポーツ界のトップアスリートの方々と知り合うことができました。彼らは非常にプラス思考でして、何事にも前向きです。そのような姿勢からは大いに刺激を受けました。また、スポーツ政策を学際的に研究するために「スポーツ政策フォーラム」が開催されておりまして、これは総合政策科学研究科の設立に尽力された故・安枝英紳先生を中心として、佐藤義彦先生・真山達志先生・横山勝彦先生が約10年前に立ち上げられた研究会です。今のところ2ヶ月に1回のペースで大学院生の研究発表やスポーツ関係者の実践報告などの意見交換を行っておりまして、そこで培われた「ヒューマン・ネットワーク」も私が研究を進めるうえではとても有益です。

あと、高校の教員として生活してはなかなか知り合う機会がない企業人の方々とも交流することができましたよ。彼らの考え方というのは非常に合理的かつ無駄がないものでして、様々な場面で議論をするのがとても楽しく、勉強になりましたね。

【三浦】 なるほど。そのように大学院生活で学んだこと、あるいは現在学んでいることというのは仕事の場においてどのように活かしていますか。

【黒澤】 大学院に入学する以前は、高校の教員として実践重視で物事に対処していました。すなわち、現在の制度や既存の教育システムを普遍的なものとして受け入れ、その枠内で問題解決を図ろうとしていたんです。しかし、大学院に入学して様々な知識や考え方を身につけてからは、そもそもこの制度は何を目的としているのだろうか、このシステムは現状に即している



黒澤 寛己 (くろさわひろき)

1968年生まれ。京都府京都市出身。同志社大学商学部商学科卒業。同大学院総合政策科学研究科博士前期課程修了（2003年度生）。同研究科博士後期課程在学中（2005年度生）。研究テーマは「我が国の教育政策におけるスポーツの活用と効果について—中学校・高等学校運動部活動を視点に一—」

のだろうか、改善する余地はないのだろうか、など根本的な部分に対して疑問をもち、あるべき方向性を自分なりに考えるようになりました。

また、運動部活動に関しては、私は柔道部の顧問・監督をしているのですが、指導に際してスポーツの本質的な部分、たとえば理論や歴史を教えてあげられるようになった気がします。これには大学院の授業、具体的にはスポーツ政策論などスポーツ関連の授業を通して身につけた知識が大いに役立っていますね。

さらに、私が担当する地理や歴史の授業についても同様です。大学院で得た知識のおかげで教科書には載っていない奥深いところまで生徒に教えてあげることができるようになりました。生徒も興味をもって授業を聞いてくれるので、とてもうれしいです。

加えて、現在も大学院において研究を続けていることから、「先生も勉強しているんだよ」と生徒に対して伝えられるのも個人的には強みになっている気がしますね。概して、教員というのは「先生は授業を教えるだけで自主的には勉強していない」と生徒から思われがちなところがないわけではないと思います。その点、「先生も大学院に通っていて、こういった勉強をしているんだよ」と話をすると、生徒がその話に食いついてきて、彼らとのコミュニケーションの幅が一層広がります。

伏見工業での仕事と現在の自分

【三浦】 それでは、黒澤さんのお仕事の話ですが、お勤め先の伏見工業について、学校の概要をご説明いただけますか。

【黒澤】 伏見工業には全日制と定時制とがありまして、昼間と夜間は生徒も教員もまったく別です。「違う学校が同じ建物を使っている」とイメージしていただければわかりやすいと思います。

「伏見工業」といえば映画のモデルにもなったラグビー部があまりにも有名ですが、サッカー部など他のクラブも活動がとても盛んなんですよ。毎日、頑張って夜遅くまで練習をしています。

ちなみに、私は夜間定時制の教員ですので、そちらのほうの概要を説明させていただきますと、昨年に学科改変がありまして、現在は機械科・都市建設科・工業技術科の3つの学科から構成されています。そして、学校の方針というのは、多くの生徒に教育の機会を与えることを目的としており、「伏見工業で勉強したい」という強い想いをもっているならそういった生徒を可能な限り受け入れて、社会で自立できるように育てていこう、というものです。生徒については、働きながら勉強する「勤労学生」が多く、年齢は中学を卒業した15歳くらいの者から上は40歳くらいの者までがいて、みんなで一緒に勉強しています。彼らは建築業や運送業など日中

～コラム 京都市立伏見工業高校定時制～

本校は、昭和19年4月、京都市立深草工業高校として、京都市立第二工業学校に付設されたのに始まりますが、その当初から勤労青少年のための教育機関として広く開放し、多くの有能な人材を産業社会に送り出してきました。

昭和23年の学制改革によって高等学校となり、機械、土木、建築科が設置されましたが、入学生徒および社会のニーズにより則した学校に改革すべく、平成10年度より機械科、都市建設科に、さらに平成19年度より工業技術科に学科改変しました。

そこでは、日進月歩の現代社会に貢献する中堅技術者となるための普通科目と専門科目を教育的熱意に燃えた先生たちが、分かり易く丁寧に指導します。また、平成14年度から完全学校週5日制となり、ゆとりある教育活動を展開します。

京都市立伏見工業高等学校夜間定時制HP「学校紹介・沿革」より。

<http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/fushimi-t/gakkousyukai.htm>

は各自の仕事に従事し、授業ははじまる時間までに登校します。授業は17時半から21時5分までの4時間制でして、週に2回のペースで放課後の1時間程度が運動部活動にあてられています。このような形で、生徒は4年間の夜間定時制で高校生活を過ごすことになります。

【三浦】 黒澤さん個人としては、どのようなお仕事を担当されていますか。

【黒澤】 現在の私の役職は、①3年生のクラス担任、②3年生の学年主任、③社会科の教科主任、④柔道部の顧問・監督、の4つになります。そのうち、学年主任については、文化祭や体育祭など各種行事や学年全体の取り組みのまとめ役という位置付けです。また、生徒指導も各クラスの担任が担当するのではなく、学年全体として行っていくことになっておりますので、その際にもまとめ役として学年の先生方とともに指導にあたります。

教科主任に関しては、社会科の先生方のなかで誰がどの授業を担当するのかを決定すること、教科書の選定を行うこと、授業内容を決めること、などが仕事としてあります。あと、私個人としましては、1コマ45分の地理や歴史の授業が週に12コマあり、担任クラスのホームルームも週に1コマ担当しています。

【三浦】 いろいろな役職を兼ねられていて大変そうですね。黒澤さんの研究テーマに関係する運動部活動についてはいかがですか。

【黒澤】 週に2回、柔道部の顧問・監督として生徒の指導にあたっています。試合前には週に3回になったりしますし、他の学校との合同練習会を開いたりもします。7月には定時制高校と通信制高校を合わせた京都府内の予選があり、8月には全国大会が東京で開催されます。ちなみに、今年は個人の軽量級で全国ベスト16の戦績を残しました。

もちろん、私が指導している柔道部以外の運動部活動も盛んでして、身体を動かしたいという生徒のニーズが多く、みんな熱心に活動しています。おそらく、彼らにとって運動部活動というのは、昼間は働いて夜間は学校で授業を受けるといった毎日の生活のなかでの大きな楽しみ・息抜きになっているんだと思います。

【三浦】 そのようにお仕事をされていくうえで、時にはご苦労もありそうですね。

【黒澤】 それはどうしてもありますよね。特に、

生徒が多様化していて、生徒同士や教員との関係も感情的になる場面が多いです。そういった場合には生徒指導という形で対処していくわけですが、それが深夜に及ぶこともあったりします。

【三浦】 その一方で、お仕事にやりがいを感じるときもあるでしょう。

【黒澤】 もちろんです。たとえば、まったくの素人で高校から柔道を始めた生徒が、受け身もなかなか上手くできなかったのに、練習を重ねて試合で勝ったときは、本当に感極まります。また、卒業式はもちろんのこと、担任をした卒業生の結婚式に参加させていただいたときなども大きな喜びを感じますね。高校時代に黒澤先生に出会えてよかったと思ってもらえればうれしいですね。

伏見工業のこれからと自分

【三浦】 それでは、伏見工業の展望を教えてくださいいただけますか。

【黒澤】 展望というより学校の課題になります。今日では少子化の影響により、夜間定時制高校の統廃合が進んでいます。そのため、これからはそうした状況をふまえて、生徒が「入学したいな」と思うような学校づくりを行っていく必要があります。具体的には、たとえばカリキュラムや運動部活動を魅力あるものにしていくことが考えられますよね。これまではクラス数を削減するなどして少子化の影響に対処してきましたが、いよいよ現実に学校自体の統廃合も進んできているんです。そのため、私個人としましては、何か生徒を惹きつける魅力的なメニューを提示することが課題として指摘できると思います。

【三浦】 黒澤さん個人の展望としては、いかがでしょうか。

【黒澤】 私個人の展望につきましては、研究面と仕事面のそれぞれがあります。まず、研究面に関しては、まずは自分が納得いく博士論文を書き上げて、その成果を学会や各種の紀要の場で公表し、さらに先生方から様々な意見を頂戴してみたいですね。そのうえで、望ましい運動部活動を広めていきたいというのが研究面での展望です。

また、仕事面に関しては、今日ではいじめや不登校といった教育問題がクローズアップされていますよね。そのため、仮に自分が関わる生徒にそのような問題が発生した場合には、少しでもよい方向に正してあげられるように親身になってしっかりと指導していきたいです。

みなさんへ

【三浦】最後に、読者のみなさんに何かメッセージをいただけますか。

【黒澤】私が社会人大学院生であることから、これから総合政策科学研究科への入学を考えておられる社会人の方に向けてのメッセージになりますが、たとえ社会人大学院生という立場であるにしても、自分の本業を手抜きすることは絶対にできません。つまり、常に全力で自らの仕事に取り組んだうえで、研究に励むこととなります。学業を理由にして、仕事が増えるのを拒否することは許されないのです。そのため、私の経験を少しお話させていただくと、主任業務などを抱えながらの大学院生活でしたので、レポートの提出などは心を鬼にして乗り切

りました。その結果、自分の趣味の時間などをどうしても犠牲にせざるをえませんでした。しかし、そのおかげで日々の生活における無駄な時間が減り、少しの合間ができると研究資料に目をおすなど時間を有効に使うようになりました。

それに加えて、博士前期課程だと2年間という長いようで短い期間のうちに、私は大学院では自分が想像していた以上の知的刺激を受けることができたわけですし、たとえ社会人であっても大学院に通うことには大きな意義を見出せると感じています。しかも、総合政策科学研究科は先ほど触れたように夜間に開講されている授業が多く、また先生方も指導にあたっては社会人大学院生の事情というものもかなり考慮してくださりますので、社会人が研究に励む環境としては最高のものだと思っているところで

【三浦】どうもありがとうございました。今回は黒澤さんが社会人大学院生ということで、ご自身がどのようなお仕事をされているのかというところに加え、仕事と研究の両立についていろいろおうかがいすることができました。黒澤さんの今後のご活躍も楽しみにしております。



黒澤さんの勤務風景

担当者が代わります

第1回から三浦が「総政人の巧」を担当させていただきましたが、今回をもって担当者が交代になり、次回からは新しい大学院生がこの企画を担当いたします。

今後とも、ご愛読のほど、よろしくお願い申し上げます。

「総政人の巧」企画部会 三浦哲司
yu51983@nifty.com